

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2002.12) 3巻1号:85-86.

【学会の動向】第88回日本消化器病学会総会を終えて

牧野 勲

学界の動向

第88回日本消化器病学会総会を終えて

牧 野 勲*

日本消化器病学会は発足が明治31年（1898）で、現在まで1世紀を越える歴史と伝統を有し、現会員数が27000余名を有するマンモス学会で、春には総会、秋には大会の全国規模の学会が開催されます。この度、私が第88回日本消化器病学会総会会長を仰せつかり、本総会を平成14年4月24日（水）より3日間、旭川市の旭川市民文化会館・旭川グランドホテル・ニュー北海ホテルで開催致しました。北海道における本学会の全国規模の学会開催は13年振りでありましたが、開催期間中は天候にも恵まれ、参加者は約4100名に達し、ここに無事に終了することが出来ましたことを、皆様方に心から感謝致しております。

本総会の開催に際し、最近の医学は遺伝子解読からポストゲノム時代へと進行中ですので、本総会の理念に『生命情報の学習と活用』を掲げ、特別講演は宇井理生東大名誉教授の「生命を育む情報」、黒木登志夫岐阜大学学長の「21世紀、がんを克服するために何が必要か」、水戸廻郎旭川医大名誉教授の「肝機能再建に挑んだ一外科医から新世紀再生医療へのメッセージ」、招待講演はベルリンMax-Delbruck-CenterのScheidereit博士の「NF- κ Bシグナル迷路」、三浦綾子記念財団理事長三浦光世先生の「愛と光と生きること」をプログラムに盛り込んでおりましたので、上記の先生方からは『生命』に関する科学面、医学面、また哲学的に有意義なご講演を賜りました。加えて、藤原研司理事長が「医師の混迷、そして」と題するご講演をされ、医療提供者は医療現場で理想と現実の狭間で混迷に陥っているが、今こそ医師はその本質を見極める必要が有ることを強調されましたし、また私は自分のライフワークとして「胆汁酸療法の展開－利胆から免疫調整作用まで」の会長講演をさせていただきました。主題は病態、診断、治療のトピックスに絞りましたが、シンポジウムは「B型慢性肝疾患の治療の進歩」「肝

癌治療の最前線」「Hp除菌療法－保険適応後の問題点」「消化管疾患遺伝子診断の新展開」「難治性炎症性腸疾患での治療の工夫」「消化器疾患と動脈硬化」「ポストゲノム時代の消化器病研究の展望」「消化器疾患のケモプリベンション－新しい試みと実証」の8題、パネルディスカッションは「生体肝移植の現状と将来展望」「本邦における難治性肝疾患の新たな展開」「C型慢性肝炎治療の新たな展開－生命予後改善」「消化器疾患と胆汁酸研究－今後の展開」「GERDに対する治療戦略」「MALTooma発生機序とno return point」「大腸sm癌の内視鏡治療適応拡大をめぐる諸問題」「ケモカインの消化器疾患での役割」の8題、ワークショップは「肝脂肪化をめぐる最近の諸問題」「劇症肝炎の治療をめぐる最近の展開」「胆管癌、膵癌に対する新しい画像診断と治療体系」「重症急性膵炎の治療戦略」「膵管狭細型慢性膵炎の病態と診断－膵癌との鑑別を含めて」「食道表在癌の最新の治療戦略」「難治性食道・胃静脈瘤の血行動態と治療」「消化器の再生医学の現状」の8題で主題は総計24を組みました。さらに、社会問題にまで発展している医療事故に関し、特別企画「消化器領域におけるリスクマネジメント」を設定し、文部科学省大学病院指導室の専門官にお出でを願い、特別発言を賜わると共に、発表者との間で有意義な討論が行われました。また、総会では2年毎に国際シンポジウムも同時開催されますが、今回はその開催年ですので、GERD、IBD、ポストゲノムの肝胆膵の三領域における海外の第一人者7名をお招きして、最新情報に関する討論が行われました。テーマによっては会場に立ち見の参加者が出て、用意した冊子が品切れになるほどの盛況でした。

市民公開講座は「食と消化器病」をテーマに第一部が「新しい食品と健康」、第二部は「食品と消化器病」、第三部は長野冬期オリンピックのゴールドメダリスト

*旭川医科大学 副学長・病院長

原田雅彦選手による「限りなき挑戦」と題するご講演でした。会場の旭川市民文化会館の大ホールが約950名の市民の方で埋まりましたが、皆様に健康維持に対する食物の重要性を少しでも理解していただけたのは幸いでしたし、原田選手のさわやかな話術によって有意義で楽しい市民公開講座になりましたことを喜んでおります。

この第88回総会の運営に関する余談を少し申し上げたいと思います。私達は準備段階で参加者数を4200名と見込んで予算を作成致しましたが（実際の集計で4100名）、その際に旭川市内におけるホテルの宿泊収容人数が問題になりました。そこで、旭川市内に約3000名、札幌市内約1000余名を予測し、札幌市内宿泊者の輸送を如何に円滑にするかを思案致しました。その時、JR北海道が会期期間中は朝の開始時間に間に合うよう札幌発午前6時57分、旭川着8時25分の臨時特急ホワイトアローを仕立てて下さいましたので、宿泊、輸送に関しては全くトラブルなく学会を運営することが出来ました。格別な配慮をして下さいましたJR北海道をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

げます。

また、今回は参加者の皆様はるばる旭川にお出でになりますので、北の旭川医大の遠隔医療センターの見学を企画し、会場の旭川市民文化会館と旭川医大の間にシャトルバスを用意しましたが、その際、外来玄関を通らずに遠隔医療センターの建物横のドアから直接出入りをして頂く便宜を図って頂き、事務系の皆様にお世話になりました。あらためて厚くお礼申し上げます。

学会での昼食や夕食のために最近ランチオンセミナーやイブニングセミナーが用意されますが、今回、旭川の食べ物は押し並べて美味しいと好評でした。特に旭川ラーメンについては高い評価を耳にし、再認識致しました。

最後に、今回の総会開催に関しては第二内科の教室員が全員一丸となって協力してくれました。前年秋以降、学会準備が忙しくなってくるに伴い、全員が各自の得意分野を自発的に担当してくれ、私あまり指示することなく、自然の成りゆきでこの大山を無事にクリアーできたことは驚きでした。私は教室員に感謝し、喜んでいる次第です。

表紙解説

太陽系の誕生です。実物とは少し趣を変え、惑星の名前から連想されるイメージにしてみました。淡いブルーの水星、七色にきらめくシャボン玉のような金星、地球、赤みを帯びた火星、節目のある木星、岩石でできた土星。（紙面の都合上、第6惑星まで）

惑星と太陽との間に働いている引力を表すため、講座名をリング状に配置しました。各惑星が微妙な均衡を保ちながら太陽の周りを公転しています。

しかし、釣り合っているはずなのに、シャボンには上向きに、岩石には下向きに力がかかっているような居心地の悪さを感じるのは私だけでしょうか。

銀河系の中心から2万8000光年離れたところに私達の太陽系が誕生したのが、46億年前と推測されています。太陽系はその生成過程において、系全体質量の99.8%を占める太陽の引力により、9つの惑星と小惑星帯を従えるようになりました。これらの惑星群は太陽に近い内側より、硬い地殻を持つ地球型惑星グループ（水星、金星、地球、火星）、ガス状惑星グループ（木星、土星、天王星、海王星）と氷でできている冥王星のグループの順に配置されています。どのような組成の惑星がどの位置に配置されるかは、すべて引力（重力）の法則が支配していると言えるのかも知れません。

そんなことを思いながら表紙を上下逆さまにして眺め、何かしらほっとするとともに、地球という天体の重力から逃げられない自分を感じるのです。

整形外科学講座 今井 充